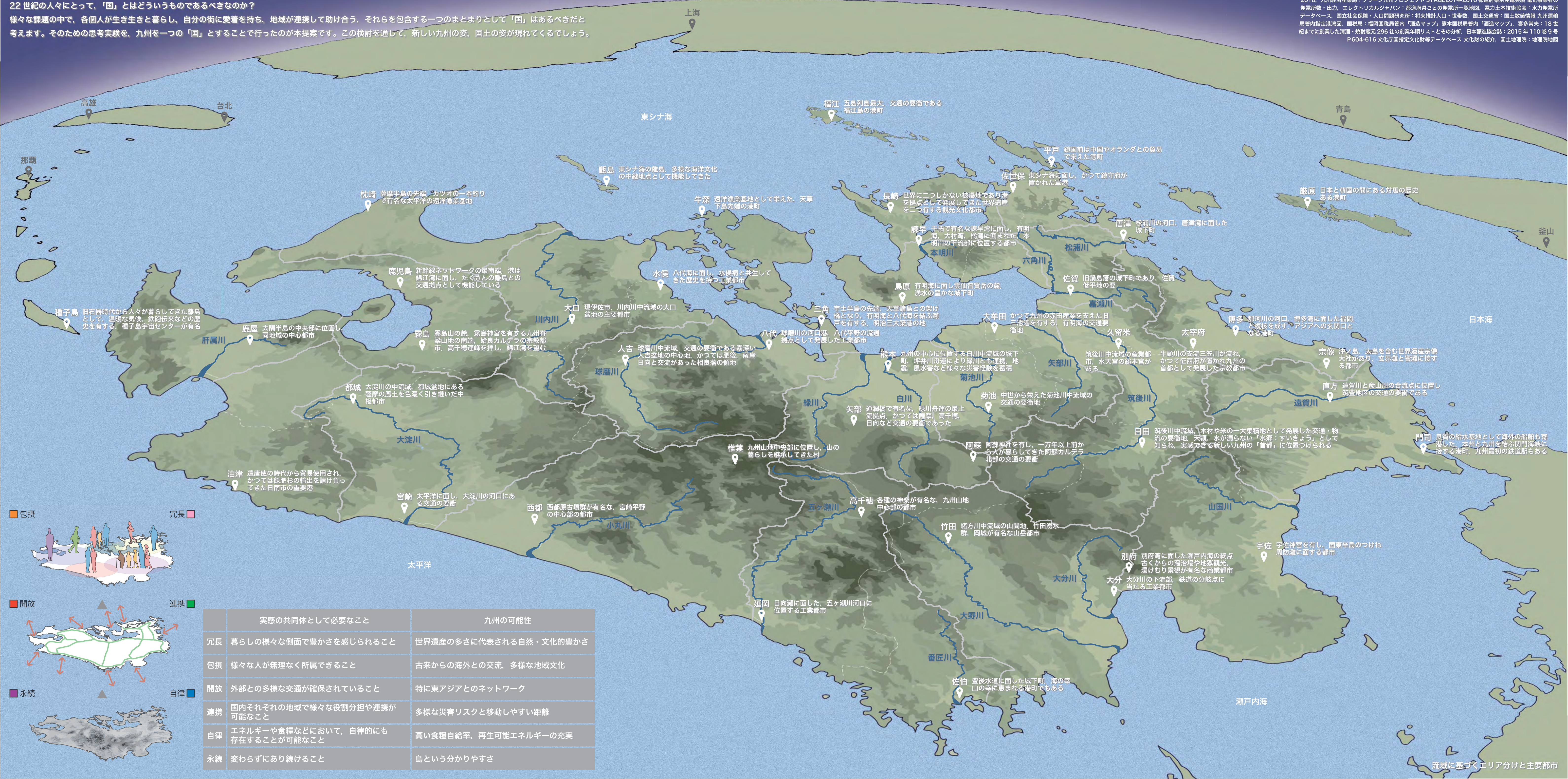


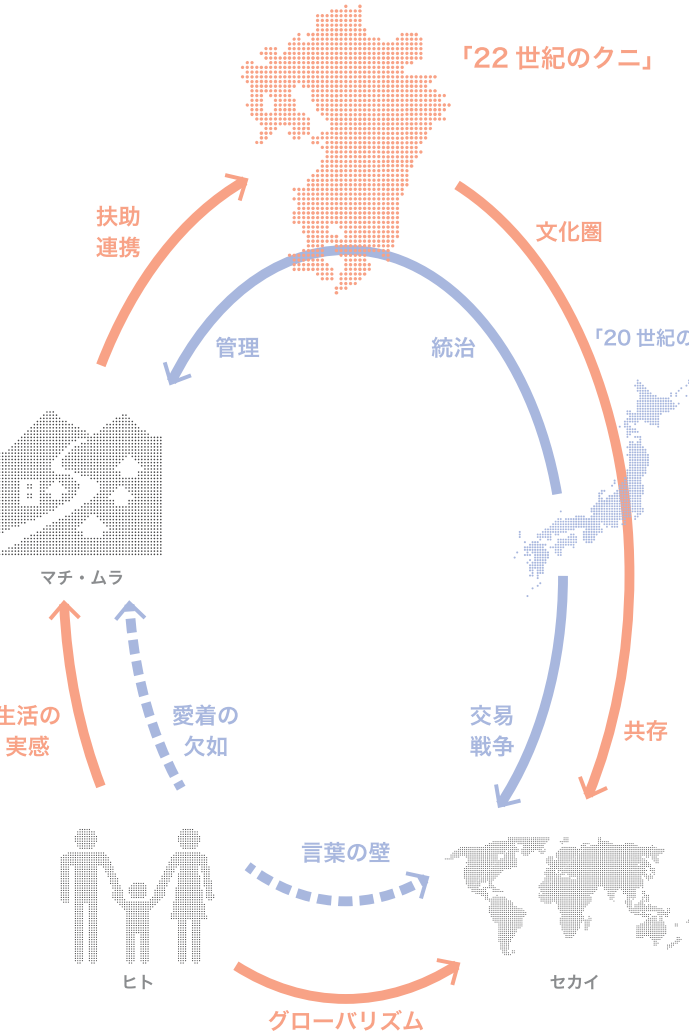
“想像の共同体” から “実感の共同体” へ

22 世紀の人々にとって、「国」とはどういうものであるべきなのか？

様々な課題の中で、各個人が生き生きと暮らし、自分の街に愛着を持ち、地域が連携して助け合う、それらを包含する一つのまとまりとして「国」はあるべきだと考えます。そのための思考実験を、九州を一つの「国」とすることで行ったのが本提案です。この検討を通して、新しい九州の姿、国土の姿が現れてくるでしょう。

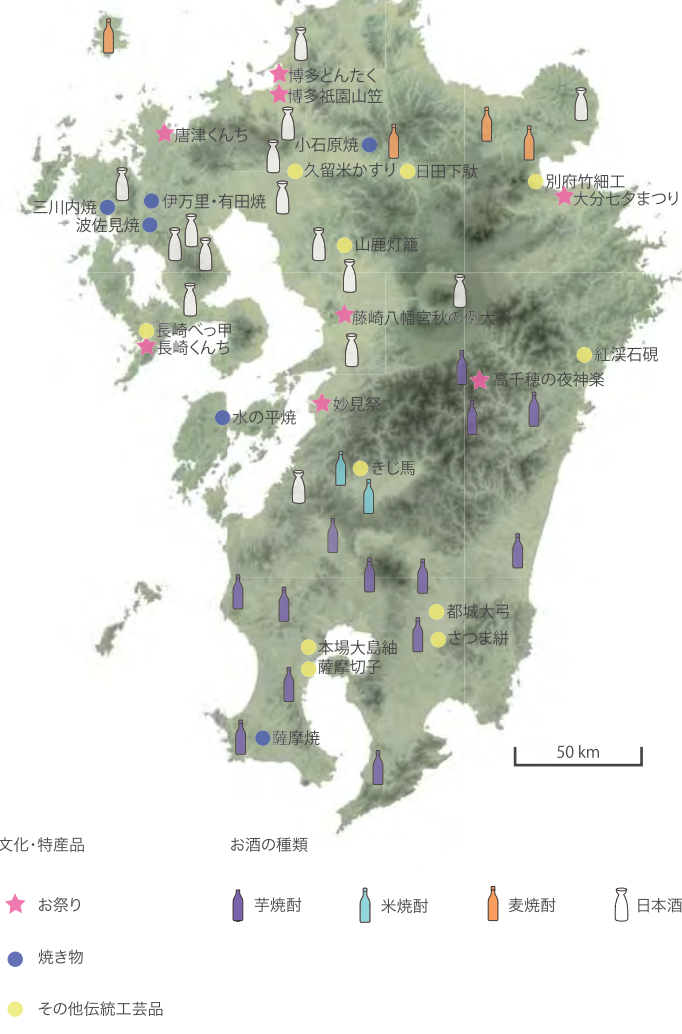


データ参照元一覧 / 一般社団法人九州地域づくり協会：九州災害履歴情報データベース、気象庁：度データベース検索、国土交通省：重ねるハザードマップ、農林水産省：都道府県別食料自給率について、九州電力：九州電力データブック 2018、九州経済産業局：クリーン九州プロジェクト STAGE2014-2016 都道府県別発電実績 電気事業者の発電所数・出力、エレクトロニクスジャパン：都道府県ごとの発電所一覧地図、電力土木技術協会：水力発電所データベース、国立社会保障・人口問題研究所：将来推計人口、世帯数、国土交通省：国土数値情報 九州運輸局管内指定港図、国税局：福岡国税局管内「酒造マップ」、熊本国税局管内「酒造マップ」、喜多常夫：18 世紀までに創業した清酒・焼酎蔵元 296 社の創業年順リストとその分析、日本醸造協会誌：2015 年 110 巻 9 号 P 604-616 文化庁国指定文化財等データベース 文化財の紹介、国土地理院：地理院地図



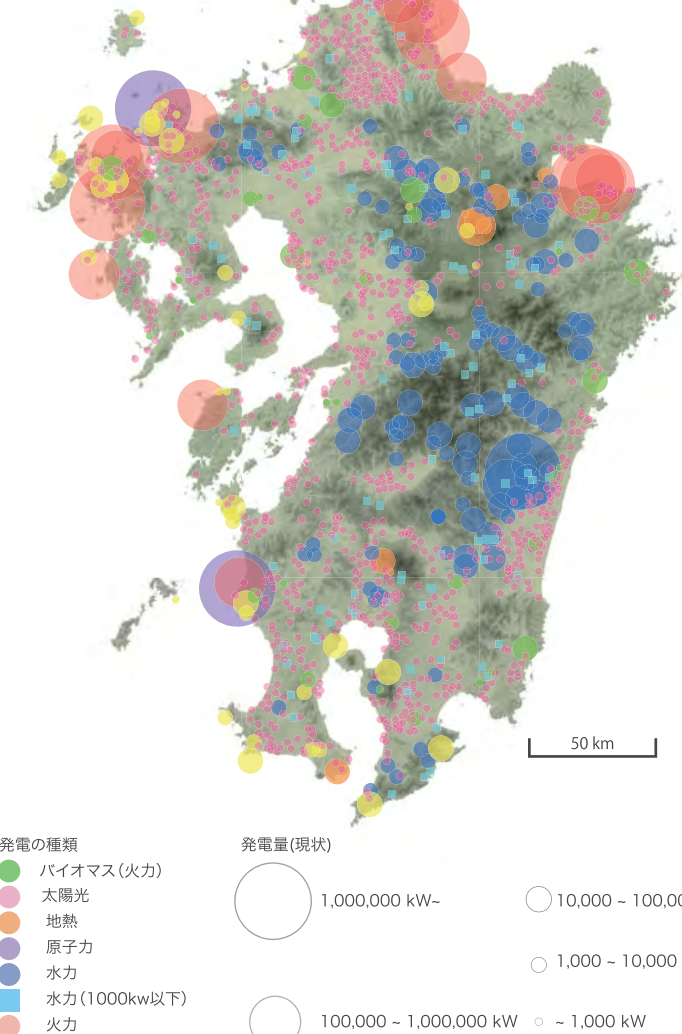
人、国、世界の関係

22 世紀にはどのような変化が訪れているのでしょうか。個人レベルでは、移動コストの減少や言葉の壁の解消などによって、物理的にも情報的にも、近代的な国境の意味が薄れて行くでしょう。一方で、自然災害への対応、食料やエネルギーの自給、世界的な人口のアンバランスの解消など、地域が相互に扶助すべき課題も多くなって行きます。そのような状況の中で、近代的な国民国家としての“想像の共同体”ではなく、地形条件にも自然で、100 年後にも持続し、国民のメンバーが一つのまとまりとして納得できる“実感の共同体”を国として想定することが大切だと考えました。その一つの回答が九州を一つの国とする仮説です。22 世紀の新しい国においては、世界をフィールドとする個人が、生活の実感を得ながら街に暮らし、それらの街は相互に扶助、連携し、自然条件に基づいたまとまりとしての国が、近隣の国々と新しい文化圏を形成していくものとなるでしょう。



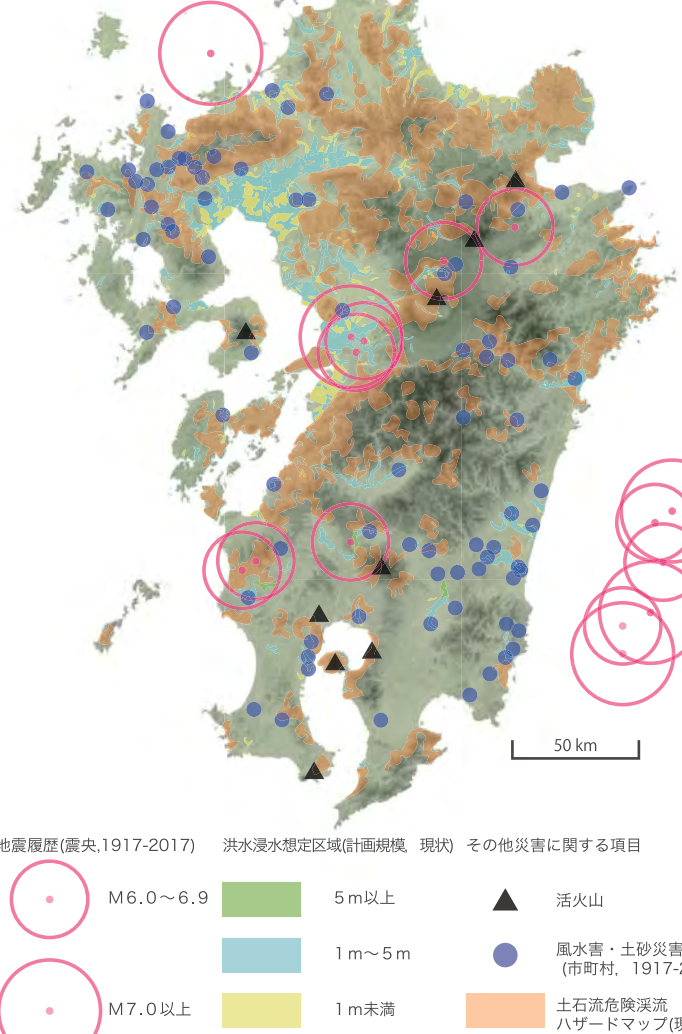
持続性と連携に根ざした地域の生活文化の多様性

豊かな自然、先史時代からの大陸との交流や地域同士の緩やかな連携により育まれた九州の生活文化の多様性は、衣食住様々な場面で見られます。地域の食文化を支え、神事や薬としても用いられるお酒、九州では焼酎や日本酒が代表されます。焼酎は、鹿児島・宮崎では芋、熊本の人吉球磨では米、大分、長崎などでは麦焼酎が主流です。日本酒の造り酒屋は、主に福岡県、佐賀県、熊本県の米処に立地しています。良質な陶土が取れる九州北部を中心に、大陸伝来の技術が有田や伊万里などを中心に広まり、地域固有の陶磁器文化が発展しました。薩摩切子や長崎のビードロ、久留米がすりや各地の木製玩具など、九州の民芸品のバリエーションは豊かです。九州の三大祭は、博多の「どんたく」、祇園の「山笠」、八代の「妙見祭」と言われていますが、三つ目は地域によって違うといえます。さらに九州には、宗像大社、霧島神社、阿蘇神社など社格の高い神社や、全国の元締めとなる宇佐神宮、久留米の水天宮など、各地の地形や風土と結びついた神社が多くあります。



豊かな自然に支えられた自律的な再生可能エネルギー

国としての自律性の面から食料とエネルギーの自給率は重要です。食料に関しては、日本の食料自給率は 4 割を切るのに対し、都市と農村の近接性の観点から有利な九州では、全体でも 5 割を超え佐賀県では 9 割を超えています（カロリーベース）。一方エネルギーに関しては、九州における発電の現状としては 7 割以上を火力に頼っていますが、風力発電所は日本の約 2 割、地熱発電所は日本の約 4 割が九州に立地し、太陽光発電に関しては、九州電力がいち早く出力制御に乗り出すほどに多くの発電量があります。このように再生可能エネルギーが発実していることにも九州の特徴が表れています。煤々と輝く太陽、海上や草原を吹き渡る風、小川川や用水までも利用可能な水力、モウモウと水蒸気を吹き上げる地熱、豊かな林業と直結するバイオマスなど、自然からの恵みをそのままエネルギーとすることこれらの再生可能エネルギーは、環境問題への貢献とともに、エネルギー利用の実感を私たちに与えてくれるでしょう。



災害経験知の蓄積と相互扶助的な連携

自然の恵みが豊かであれば、その脅威もまた大きくなります。火山、断層、風水害。九州は自然災害も多い土地です。自然災害のさらなる頻発、激甚化が想定される 22 世紀において、九州各地に多く残っている災害に関する伝承や防災・減災の知恵、近現代における災害復旧事業の優れた取り組みなど、それらの経験や実感の蓄積は、大きな財産になるでしょう。また左図に示したように、移動しやすい適度な広さの九州の中に、多様な災害が広く分布していることも重要です。なぜなら、防災ではなく減災という立場に立つならば、災害において全滅しないこと、他の都市や集落からできるだけ早く救援に行けること、相互扶助的な支援のネットワークが重要だからです。自然災害の中でも、その数も多く、ある程度の予測も可能な風水害に対して、運命共同体的な流域圏を一つの自治の単位と捉えることは有効に働くでしょう。多くの自然災害によって鍛えられた、自然への豊かな感性は、共同体を形成していく“実感”の基盤となるものだと考えます。